

スクールカウンセラーと適応指導教室が連携した事例からみた不登校支援のあり方
～カウンセリングの視点から～

開 田 有 希

The way for the school refusal students based on the case study of the cooperation
with the school counselor and adaptation guidance classes
～ From the perspective of counseling ～

Yuki Hirakida

要約：スクールカウンセラー（以下 SC）は自治体によって様々な規制がある。本研究では、出張等での情報交換・連携等が難しい自治体における SC と適応指導教室が連携した事例をもとに、これからの新しい不登校支援のあり方を検討した。その結果、電話や連絡会等で SC と適応指導教室が交流を図り、率直に相談する関係を作ることで、不登校生徒の気持ちやペースを尊重しながら適応指導教室になげられることが示唆された。

キーワード：不登校、スクールカウンセラー、適応指導教室

1. 問題と目的

『平成 27 年度文部科学白書』によると、平成 26 年度の全国の小・中学校の不登校児童生徒数は、約 12 万 3000 人、高等学校は約 5 万 3000 人と、依然として相当数に上っている。近年、これらの不登校生徒が、自治体の適応指導教室を利用しているケースは少なくない。例えば、本山（2011）は、不登校児童生徒の 10% 程度を適応指導教室が対応していると述べている。

適応指導教室について、文部科学省（2003）は、次のように定義している。適応指導教室とは、「教育委員会が、教育センター等学校以外の場所や学校の余裕教室等において、不登校児童生徒の学校生活への復帰を支援するため、児童生徒の在籍校と連携を取りつつ、個別カウンセリング、集団での指導、教科指導等を組織的・計画的に行う施設として設置したもの」とされる。また「不登校児童生徒の中には、学校外の施設において相談・指導を受け、学校復帰への懸命の努力を続けている者もあり、このような児童生徒の努力を学校として評価し支援するため、我が国の義務教育制度を前提としつつ、一定の要件を満たす場合に、これら施設において相談・指導を受けた日数を指導要録上出席扱いとすることができ」とされている。

このように適応指導教室への通室が、学校における出席扱いになることは、児童生徒にとっても、保護者にとっても魅力的な面があるといえる。そして、学校ほどの大集団ではない適応指導教室の小集団での学習や活動は不登校の児童生徒にとって参加しやすいものであろうことは想像に難くないといえる。

しかし、不登校の児童生徒の中には、いじめやからかい等の対人関係における傷つきを体験している者は少なくない。そのことを踏まえると、適応指導教室にスムーズに入室できるものもいれば、新たな人間関係を築くことに不安を覚えるものもいるであろう。後者の場合、適応指導教室を児童生徒が利用しはじめる際に、スクールカウンセラー（以下 SC）がその児童生徒のカウンセリングに関わっている場合、「橋渡し役」を担うことも少なくないといえる。

例えば、福丸（2005）は、SC が橋渡しをする「場」に対しても慎重な見立てを行い、丁寧につなげていく必要があると指摘している。このことを踏まえると、SC が新たな「場」に児童生徒を橋渡しする場合、「場」を見立てるために、出張等で適応指導教室におもむき、直接生徒について、情報交換・連携等することが期待されるといえよう。

しかし、自治体によっては、スクールカウンセラーが出張で適応指導教室におもむき、直接生徒について、情報交換・連携等が可能のところもあれば、不可能なところもある。後者の場合は、連携の在り方を工夫・模索する必要がある。そこで本研究では、出張等での情報交換・連携等が難しい自治体での、スクールカウンセラーと適応指導教室が連携した事例をもとに、これからの新しい不登校支援のあり方をカウンセリングの視点から検討する。

2. SCの勤務体系

SCの勤務体系は、自治体によって様々である。ここでは主に首都圏の二つの自治体におけるSCの勤務体系を比較する。

東京都の場合は、SCは全校配置されている。年間38回の勤務で、1日の勤務時間は7時間45分である。東京都の場合は、入学式等児童生徒が半日しか学校にいない日の勤務は控えるよう指示がでている。長期休業中の勤務も基本的には認められていない。出張についても、年間で定められた東京都及び所属する自治体のSC連絡会のみ認められている。それ以外の出張は原則認められていない。

埼玉県の場合は、SCは全校配置されておらず、その代わりに心の教室相談員が配置されている。学校によっては、SCと心の教室相談員の両方が配置されているところもある。後者の場合は、連携校のSCが、必要に応じて、相談を行うシステムをとっている。年間42回の勤務で、1日の勤務時間は5時間50分である。式典の日、長期休業期間でも、勤務は認められている。

首都圏の2つの自治体の勤務体系を比較すると、東京都の場合は厳しい出張制限があることがみてとれる。そのことから、SCが児童生徒を適応指導教室につなげたい場合に、出張で赴くことは難しい現状であるといえる。

3. 事例における学校・相談機関等の概要

首都圏の公立中学校で、大規模校である。SCは着任して2年目である。教育相談室と適応指導教室は離れた場所にあり、それぞれに心理職が配置されている。自治体主催のSC連絡会は年に2回あり、教育相談室の相談員や適応指導教室の指導員等も参加している。連絡会の後半に学区ごとに分かれた分科会がある。そこで、学区の小・中学校のSC、教育相談員、指導員等が情報交換や連携を行っている。適応指導教室には、心理職が配置されており、通室している不登校生徒に対して、在籍校のSCのカウンセリングを受けるよう働きかけを行っている。

4. 事例の概要及び流れ

ここでは、筆者がSCとして、適応指導教室と連携しながら不登校生徒を、支援した事例をもとに検討を行う。プライバシー保護のため一部個人情報等の修正を行っている。＜＞はSC、「」はクライアントやその母親の語りである。

A子。来談期間は、X年4月～X年+1年3月である。初回来談時14歳(中学3年生)。中学3年生になり、私立中学校から転校してきた。小学校6年生の12月から学校に行きなくなかった。理由は、男子からのからかいやいじめ。学区の中学校には進学したくなく、

私立女子中学校を受験し合格。入学して数日通ったが、小学校の頃のことを思い出し、その後は母親の付き添いのもと担任と会ったり、月に1回SCと会ったりしていた。中学1年生時の担任（英語科）に丁寧に英語を教えてもらった体験があり、A子はその担任にポジティブな思いを抱き、英語に力を入れて学習していた。中学2年生の時に、学年主任から、このままでは付属高校には行けないから、公立校を考えてはどうか、発達障害があるのではないかと、調べてみてはどうかと言われた。A子の母親は、学校をやめるか、在籍を続けるのであれば病院に行くようにと言われたように感じ、退学を考えた。その後、学区の中学校への転校は望まず、マンションを借りて、知り合いのいない公立中学校に3年生の4月から転校する。家族は、40代の両親と本人の3人家族。A子は普段からあまり外出せず、家で過ごすことが多いが、母親との共通の趣味であるプロ野球を観戦するときには外出する。

面接の枠組み。SCの勤務日に、月に1～2回程度、校内の相談室で50分間、親子並行面接（後半は本人のみの面接も数回）を行う。A子が同年代とすれ違うことに不安を覚えたため、休み時間になる前に面接を終え、見送りをすることを心がけた。

第1期 出会いから学校という「場」に慣れるまで

#1～#4（X年4月～X年6月）

#1：初回X年4月2週目。転校早々の4月に担任がSCのカウンセリングに繋がった。主訴は「今年度は教室に入るのは正直に言うと難しそう。高校は通信制かなと考えている」というものであった。

学校という場所に不安や緊張を覚え、休み時間等に生徒の声が聞こえると不安そうにしていた。母親は、A子に「あのことを（SCに）伝えていいか。」と確認をとるなど、本人の意思を確認・尊重することを大事にしている様子であった。親子のニーズとしては、進学は通信制高校を希望しており、教室に入ることは希望しておらず、SCのカウンセリングは月に1回程度受けたらいいというものであった。

初回のSCの対応としては、中学3年生という進学を迎える年からの関係作りであり、月に1回では、長期休業中を除くと年間10回程度の面接になり、支援も深まりにくいことを想定し、以下の三点を伝えた。1. 慣れてきたら月2回等無理のない形で相談室で会いたいこと、2. 適応指導教室という色んな理由で学校に行きたくない、行きにくい子達が通う塾みたいな教室があるので、見学だけでもどうか、3. 高校については通信制と決めるのではなく、担任と相談しながら色々な高校を見学できるとよいのではないかと。適応指導教室については「他の人と勉強するのが抵抗がある。人と接するのが好きじゃない。接し方忘れちゃった。」と、対人関係について自信がない様子であった。そのため、SCから、まずは保護者のみ見学に行き、その時に適応指導教室の写真などを撮ってもらい、様子を確認することで少し不安が減るかもしれないことを助言した。また本人から「一人で登校するのはしんどいので、しばらくはお母さんと一緒がいい」という申し出があり、SCは了承

した。

このセッション後に SC と担任で相談し、担任から保護者に適応指導教室見学の段取りについて説明してもらう運びとなった。

2: X 年 4 月第 4 週。母のみ来談。「前回の相談で、廊下から男子の声がして、小学校の頃を思い出して、怖くなり今日は行けない」という事情が語られた。SC からは「お母さんのみ適応指導教室の見学等で動いていただけるとありがたい」と伝え、SC が関わった不登校生徒が見学等した学校名を数校伝える。

このセッション後に担任、養護教諭と相談し、健康診断を理由に保健室へ足を運べるよう働きかけをすることにした。そうすることで、SC の勤務日以外にも学校に足を運ぶ機会ができればと考えた。

3: X 年 5 月第 3 週。親子で来談。「家から学校に来るのは嫌だった。今日は雨だから校庭に誰もいないのがよかった」「通信制の B 高校のホームページを見た。自分のペースで通えるのがいいなと思った。(不登校の子どもを受け入れる公立校の) C 高校は週 5 日登校というのが自信がない。(サポート校の) D 高校も気になる。家から近いから」と A 子。母親は「適応指導教室の見学はまだ。自分がかんがん動くのもどうかなと思い 4 月は動かなかった。そろそろいいかなと思う。」と語ったため、SC からは「適応指導教室を利用する意味合いとして、高校に通うためのリハビリと考えるといい。いきなり来年 4 月から週 5 日登校は当然きつい。だから、今年度中に週に何回か通い、その感覚から来年度自分ができる高校の通学ペースを色々考えるといいと思う。そういう意味で適応指導教室の利用を勧める」と受験を考えると、定期考査はどこかで受けておくと思う。試験の雰囲気になれておくのもリハビリのひとつ。教室で受けなくても、図書室で別室受験ができる」と伝え、その後図書室に 3 人で見学に行った。また、定期健康診断を受けていなかったため、保健室に誰もいないことを確認し、養護教諭を紹介し、その場でできるものを受けた。

4: X 年 6 月第 1 週。母親のみ来談。前回の面談後、「尿検査の提出や健診をうけに、学校に 2 回いった」「5 月末に適応指導教室に親子で見学に行った。もしよかったら一緒にいく？と言ったら、本人もいくよと。見学した感想は、楽しそうでいいなと。でも先生から、週に 1 回というより、2、3 回来て欲しいと言われて、今の私には週に 2、3 回は無理・・・となった」「本人の中で転校してよかったという思いがある。SC から先輩不登校の人の進路についての話をしてもらったり、先生からその都度プリントをもらえたりしているのがいいよう。前の学校では健診は受けられず、病院で受けた。SC が保健室に連れて行ってくれて、養護の先生の雰囲気がすごくよくて、だから健診にいかうと思ったんだと思う。今朝も面談に行くために支度をしていた。でもだんだん雲行きが怪しくなり、直前にやっぱりだめだとなった。校舎が小学校の時のことを思い出させてしまうよう」

セッション後に SC から適応指導教室の心理職に電話を入れ、今の本人の状態では、週 2、3 回の登室は難しく、週 1 から始めて、慣れてきたら徐々に増やしていくことはできない

かと相談をした。心理職としても、本人の様子をみて、週2、3回の登室は、不安も高く難しそうであることは見て取れたため、指導員と話し合うと応じてくれた。

第2期 エネルギー補給の時期

#5～#8 (X年6月～X年10月)

#5：X年6月第4週。親子で来談。「通信制のB高校の学校説明会に参加した。月1のスクーリングとレポートと話を聞いて、できそうと思った。校内もみれてよかった。そこに行きたいと思う。」と進路についての意思を語る。SCが適応指導教室に相談したことを伝え、「週1でもいいならいつでもいいかなと思う。色々考えると勉強のことは気になる。そういう意味では、学校と同じようにやる適応指導教室はいいと思う。見学に行った時の授業も楽しそうだった」と、適応指導教室に通うことへのポジティブな思いを語る。SCからは通信制のB高校以外の高校もみて、多角的に比較してやっぱり通信制のB高校となるのはいいと思うので、複数見て欲しい。C高校の学校公開も見に行くだけ行ってほしい。＜＜いずれにしろ高校に行くのだから、学校に似た適応指導教室で、リハビリをしておく、通信制高校以外の選択肢も大丈夫と思えるなど、幅が広がると思う＞＞と、背中を押す働きかけを行った。面談日は、テスト期間中であったため、面談後に図書室での別室受験の様子を入口から一緒に見学し＜＜いずれここで別室受験するのもいいリハビリになる＞＞ことを伝えた。

このセッション後、適応指導教室の指導員からSCに電話があった。内容は、本人のペースで通って良いから7月中に体験をしてほしいと本人と保護者に伝えて欲しいというものであった。

#6：X年7月第1週。親子で来談。「6月末に、C高校に親子で見学に行った。学校って感じがして緊張した。授業もうつむきながら、ちらっとみた。みんな本当に悩みがあった人なのか？と思うくらい元気だった。だんだん辛くなりその日は疲れた。通信制のB高校の方が学校っぽくなくて入りやすい。自分が堂々と入ることができた。適応指導教室のことは、考えている」という語りがあった。SCから、適応指導教室の指導員から電話があり、A子のペースで通っていいと言われたことを伝え、保護者から体験の申し込みの電話をしてほしいと母親に依頼し、了承を得た。

#7：X年9月第2週。親子で来談。「7月の終わりに適応指導教室の面談にいき、そこで週1のペースでもいいと言われた。9月になり、適応指導教室の始業式に参加した。後日、数学と英語の授業に参加した。他中の3年の女の子に、英語好き？数学好き？と聞かれた。2年ぶりにくらいに同級生と話した。先生の授業受けるのも中1の4月以来で楽しかった。明日も行く。」と活き活きと語る。母親は「先週歯医者に一人で行って、帰りお店に寄って帰ってきた。行きも帰りも一人でいくななんて久しぶりすぎてびっくり。転校して本当によかった。去年、一昨年とは進み方が全然違う」と珍しく多弁であった。それを受けて、本人は「高校生になると一人で出入りすることも増えるし、中3くらいで、適応

指導教室いくことでそういうのを慣らしておこうと思う。週2くらい行ってもいいかなと思う」と語った。

SCからはく適応指導教室を楽しいと思えたことがよかった。楽しいと思う時は、人が伸びる時である。自分から週2回行ってもいいかなと思えたことがすごくいいし、主体的に決められるのがすごくいい」と伝えた。

8: X年9月第4週。親族の入院手続きのためキャンセル。

9: X年10月第2週。親子で来談。「適応指導教室には毎週木曜2、3時間目に通っている。今月末まで体験で、その後、先生達とお母さんと自分で話をする。そこで正式に入るかどうか決まる。順調にやれているから正式に入ってみようと思う。適応指導教室はすごく楽しい。先生の話聞く、黒板があること、教室で勉強できることが、久しぶりのことでそれがすごく楽しい。少人数で勉強するのが楽しい。昔は勉強も学校も嫌いだったけど。面談の時に先生から週2回位来たら？と言われたらそうしようかなと思う。他中の女の子が時々話しかけてくれる。同級生と話すのは久しぶりで緊張する。何話していいかわからない」と楽しさと戸惑いを語る。母親は「すごく成長を感じ嬉しい。自分もこの学校にきてゆとりがでた。今までの自分はすごく焦っていて、今までなら、いつから適応指導教室に週2回行くの？とすぐ聞いていたと思う。でも今は本人のペースでいいと思える。」と笑顔で語る。

SCからはく適応指導教室では校外学習や毎月の調理実習がある。きっと校外学習や調理実習は久しぶりのことだし、通信制高校では体験できないかもしれない。そうすると適応指導教室での機会は貴重なものになると思う。無理して参加する必要はないが、調理実習など作業をしながらのものだと、自然と話もできるからいつもみたいに何話せばいいのだろうと緊張しないかもしれない。参加について少し考えてみるのもいいかもしれない」と伝える。

第3期 プラスの変化期

10 ~ #18 (X年10月~ X年+1年3月)

10: X年10月第4週 親子で来談。指導員から、翌週に調理実習があり、班で行うため、会話も弾むのではないかといわれ、緊張したものの参加。調理実習は小6以来。女子4人の班で、学校の同級生もいたという。その日の帰りのバスで他中の女子生徒が話しかけてくれた。「学校に行かなくなった理由や今の学校のこと、進路のことを話し、学校がきつかったことや進路について不安なことなどが一緒だということがわかった」「普段進路のことなど同級生と話すことなんてないからすごくよかった」「その子は月曜日以外の1、2、3時間目に通っているときいて、自分もほかの曜日を増やしたいなと思った。進路について自分だけでなく、ほかの子も自分のペースに合う学校を選びたいんだとわかった。自分は本当に通信制高校でいいのかなと思った。適応指導教室みたいな高校に行きたい。その子は進路相談会みたいなものにいった。先生に色々な学校の情報を聞くといいとアドバイ

スをもたらした」「適応指導教室に行って変わったと思う。やる気がでてきた。期末テスト、英語だけでも受けようかな。中学に入り、テストは一度も受けたことないけど」と、自ら期末テスト受験への意欲を語る。

母は「同級生と帰った日は、にこにこして帰ってきた。普段一緒にすごすことが多いからほとんどのことを共有しているが、自分の知らない話をきけたのがすごく嬉しい」と、喜んでいて。

SCからはくやりたいなと思う時が、自分の中のエンジンが温まってきた時。やりたいなと思うときはどんどんトライするといい。今、仮に失敗してもそれも学びになるはず。英語のテストを別室受験したいということは担任に伝えておく>と背中を押す働きかけおよび、校内での環境調整を行った。セッション後に、SCから適応指導教室の心理職に、本人の様子を伝え、双方ともに本人がプラスの変化を遂げている時期であることを共有した。

11:X年11月第1週。親子で来談。「10月末に適応指導教室で面談して、正式に入った。自分から週2回通いたいと伝えた」「進路についてはC高校にしようか迷っている。今は火曜の1、2、3時間目と木曜の2、3時間目に行っている。火曜には進路の授業があるから選んだ。先生からは、高1の間は週3の登校でもいいんじゃない？C高校の週5日通うスタイルに迷っているんでしょうと言われた」「1月からは週3適応指導教室に行こうと思う」「帰りのバスでみんなと話をし、みんなチャレンジしているんだから自分もトライしてみようと思った。サポート校のD高校やE高校のことを友達から聞いたけど、選択肢にはなかった」「自分でもまさかここまで適応指導教室がこんなに続くとは思っていなかった。どうせ途中で終わるだろうと思っていた。でも予想と逆で楽しくて、週1から週2になっても生活リズムも崩れていない。中学は学校行けなかったから、高校は学校に行きたい。学校生活を取り戻したい」「テストは英語だけ受けようかな。うーん、でも学校に入る感じがして。。どうしよう。うーん、でも受けてみる」と悩みながら自分で決めた。

SCからはく友達の刺激を受けて、週5の学校だけどチャレンジしようと思った今が動き時だと思う。チャレンジしても大丈夫なのではないかという予想が自分の中にあるからそうしようと思えたんだと思う><テストも受けますと言って、最悪受けなくてもいい。でもどうしようかな。受けようかな、やめとこうかなと葛藤することが大事。それが成長につながる>と伝え、本人の気持ちの言語化等を行った。

#12:X年12月第2週。親子で来談。「図書室で別室受験できた。すごい緊張感がただよっていた。行きはお母さんに図書室まで送ってもらい、一人で帰った。担任の先生に、C高校を受験することを伝えた。適応指導教室は週2回行っている。技術の授業があり、そこで小学校の時に図工でからかわれたことを思い出し、しんどくなって、先生に事情を話した。」「C高校の個別相談会にいった、質問もした。4月から週5通うのは無理だから週3にしようと思う」「サポート校も一つ見に行った。いくつかパンフもらったので、今週

末もサポート校のF高校を見に行く。そこは全日制というのと週2回の登校というのがいい」

母親は「今までの娘とは思えないくらい成長している。担任にも細やかな配慮をしてもらい、適応指導教室の先生にも熱心にみてもらい本当にありがたい」と語る。

SCからは<提案として1月からは週3回適応指導教室に通い、2月は週4日、3月は週5日通うことをトライしてみてもどうか。そうすることで、自分が週5日通う力があるのかどうかわかるし、最後のリハビリになるのではないかと>と、4月からの本人の生活に近い形になるような提案を行った。そして<初めての定期テストを無事に受験し、取り組めたことは本当にすごいと思う。もし可能なら、次の相談はひとりで来るということをやってみてもどうか。できそうな気がする>と、SCの正直な感想と見立てを伝えた。

#13:X年+1年1月第2週。本人のみ。初めて、本人だけで相談室に登校。「今日は自分だけで学校に来た。中学で不登校になってから初めて一人できた。いつもお母さんが付き添ってくれていた。」とやや緊張しながら語る。サポート校のF高校見学について「漢検や英検のサポートもあって少人数だし、自分でもいいなあと思った。冬休みすごくすごく悩み、ここに行くことにした。週2日コースにする。今の自分なら、年度途中でも高2からでも週5日コースに行けると思う。今の心配は友達できるかな?体験では自分より静かそうな子が多かった。」「適応指導教室は、2月から週3日行こうと思う。今の自分なら週3日行けると思う。数学で男の先生の授業を受けられた。男の先生は苦手なのに」「適応指導教室でも何を話せばいいか悩むことはある。昨日の帰りのバスで、他中の子と一緒にになった。何話せばいいか悩んだが、確かディズニーとか好きだからその話をした。F高校でも何話せばいいのかな。本当の自分がだせないような気がする。。」と、意欲的な気持ちと友人関係作りに悩む気持ちを語る。

SCからは<普通に相談室に来ているが、今日はA子さんにとって、すごい日。その日を一緒に過ごせてSCとしてもすごく嬉しい><適応指導教室は楽しいと聞いていたが、自由な時間に友達と何を話せば良いのかという悩みがあるんだね。きっとF高校で出会う子も同じ悩みを抱えているはず。これからの面談で、どういう風な話かけ方や質問の仕方があるかを一緒に考えていけたらいいと思う>とSCの正直な感想や、A子の気持ちの整理についてのフィードバック、今後の手立てを伝えた。

#14:X年+1年2月第1週。本人のみ。「先週、今週と火曜日の適応指導教室は休んだ。体が疲れた。C高校かF高校に行こうと思っていたから、適応指導教室にもよーし行くぞ!って感じだった。進路が決まりほっとしたかも。気持ちが乗らなくなった。行きたくないってことじゃなくて。。。」「2月は週3日適応指導教室に行くことを目指す。英語がある日がいい。高校になったら英語だけ塾に通おうかと思う。」「一人で出かけたくなーと思う。でも小学校時代の子に会うのは嫌。顔見るのも嫌。塾も家の近くが良いが、少し離れたところにしようかなと思う。今でも日曜午前に近くのスーパーに行くのも抵抗がある。」

SCより<今の住所に家がある以上、いじめた子と会うことはなくならないと思う。ま

た高校3年間、大学の4年間などをA子さんもその子達も家を拠点にする可能性は高い。また自分の耐性、耐える力や折り合いをつける力の成長がカバーしてくれる可能性も高いと思うので、時間とともに気にならなくなるかもしれない。今日も普通に一人で学校に来たが、4月のA子さんからしたら信じられないと思う。それくらい急成長しているから、耐性もつくと思う>とSCの正直な感想や今後のA子の見立てを伝えた。

#15: X年+1年2月第2週。本人のみ。「定期テストは英語のみ別室受験したい。もともと受けようと思っていた」「適応指導教室は週2回行っている」「昨日バレンタインの友チョコもらった。今朝自分もお菓子作った。明日渡そうと思う。友チョコのやりとりなんて小5以来久しぶり。」「適応指導教室もあと少し。昨日、『中3、2学期から適応指導教室に通って』という作文を書かないかと言われた」「ディズニーランドが好きだけど1年くらい行けていない。人が多いのが苦手。自分の顔が変だからみんな見るのかなと思っちゃう。でも野球は全く気にせず電車に乗れる」

SCからは<色々な悩みがあると思うが、野球のように周囲を気にせず過ごせる部分があるのも事実。そういうところを少しずつ増やして行くと自信がついてくると思う><適応指導教室に通えるのもあと1ヶ月。みんなと会うために通おうと思えるなら通うといい>と伝える。

#16: X年+1年3月第1週。本人のみ。「今日も一人で登校できた。定期テストは英語のみ図書室で別室受験した。相談室にくると違い心が痛かった。お母さんに図書室まで付き添ってもらった。緊張した。問題も難しかった。別室受験していた適応指導教室のメンバーをみて安心した。」「卒業式後、校長室での個別での証書授与は遠慮したい。小学校の頃を思い出す。小学校の時の卒業証書はお父さんが取りにいった。適応指導教室の卒業式はでる」「サポート校の制服採寸に行った。この子普通だなあと思う子やこの子しんどそうだなと思う子もいた。原因はお母さんだろうなと思った。お母さんが張り切りすぎて、疲れているんだろうな。自分の親がそうだったらきつだろうなと思った」「私立のSCは、今の自分を知ったらびっくりすると思う。私立やめるっていったときは、もう少しいなよと言われた。マンション借りて、違う学区の公立に行くというのは伝えていた。でもこんな風に学校に通うつもりじゃなかった。適応指導教室にも行くつもりはなかった。」

#17: X年+1年3月第2週。本人のみ。「今日も一人で登校できた。卒業式の練習の音が聞こえて不安だったけどなんとか校内に入れた」「明日で適応指導教室は最後。1学期から通っていたらなと思うこともあるがその後悔はいい後悔だと思う。適応指導教室は行きやすい学校のような場所。学校生活に慣れなかった自分が中3の2学期でこんなに変わった。同級生と話すのも中1の1学期以来。主任の先生が存在が大きかった。安心できる人で今までの先生と違う。自分のことを気にかけてくれたのがすごく伝わってくる」「中1、中2から変わりたいと思っていた。何か一つでも変えないといけなかった。一番いいタイミングで通えた。」「最初は英語だけでも授業受けたいと思っていた。友達と交流したいなんて思っていなかった。」「高校も適応指導教室みたいに、早く〇曜日にな

らないかなと楽しみにになるといいな」「適応指導教室では、学校に慣れる力を身につけた」「自分が成長した点として、学校に通ったこと。期末テスト受けたこと。まだまだな点としては、集団行動。調理実習で積極的に話せなかった」「期末テスト受けて、自分は本当に変わったと思う。適応指導教室に行って将来こうなりたいなと考えたり、留学したいなと思ったりした」「適応指導教室で、不登校の仲間、適応指導教室の先輩の話を知ることができて、それはすごくよかった」

18: X 年 +1 年 3 月第 4 週 親子で来談。事前に SC と担任で相談し、一度だけ校長室で卒業証書を受け取ってみたいかと提案することにした。その結果、本人が了承し、校長室で担任含めた 3 学年の教員、母親、SC 同席のもと、校長から証書授与される。「適応指導教室の卒業式は緊張して声が震えたが、今日は色々なことを思い出した。」と涙を流す。その後「この学校にきて本当によかった。適応指導教室の卒業式で同級生と連絡先を交換したり、適応指導教室で一緒だった子が通う塾に自分も行く。高校も楽しめるといいな」と笑顔で語る。母親は「小学校でも参加していない卒業式に参加できた」と涙を流す。

5. 考察

(1) 第 1 期 出会いから学校という「場」に慣れるまで

SC のカウンセリングに抵抗を覚える児童生徒も少なくない中、A 子は、転校してきた時に担任からの SC のカウンセリングを受けることへの提案をスムーズに受け入れた。これは、私立中学校時の SC とのカウンセリング体験がプラスのものであったから、公立中の SC のカウンセリングを受けようと思った背景が伺える。このことから、私立中の SC が公立中の SC への「橋渡し役」を担ったといえる。

A 子は小学校 6 年生の冬からのいじめをきっかけに不登校になり、進学した私立中でも不登校状態であった中、母親が教員への不信感を覚えたこともあり、中学 3 年生の 4 月に公立中学校に転校してきたという傷つき体験、学校への恐怖感を抱いていた。そのため、A 子は当初「今年度は教室に入るのは正直に言うと難しそう。高校は通信制かなと考えている」と、述べていた。しかし、担任・養護教諭・SC で A 子についての相談を行い、A 子の状態を見ながら、学校という「場」に慣れる働きかけを行った。「場」に慣れてきた A 子は、健康診断のために保健室に登校できるようになった。これについては、学校ではどんな小さなきっかけでも、それをつなぐことによってさまざまな展開が可能になると福丸 (2005) が指摘した通りである。

(2) 第 2 期 エネルギー補給の時期

学校という「場」に慣れてきた A 子は、少しずつ行動範囲を広げていった。通信制高校を見学し、そこでならなんとかやれそうだという感覚を覚えたことで、自然とエネルギーが補給された。その様子をみた SC は、適応指導教室の利用や別室受験を提案し、働きか

けを行った。A子自身はあまり乗り気ではなかったものの、SCの伝える「リハビリ」としての意味合いには理解を示していた。そこには、高校生になった時には、学校に通えるようになりたいという思いがあったと推察される。菅野（2008）は、不登校の児童生徒が教室復帰する際に、リハビリの時間が必要であることを指摘している。エネルギー補給が行われつつあったA子自身も、今の不登校状態を続けていては、高校1年生の4月になった時に、進学先が通信制高校であってもスクーリングに通うことへの難しさを予想し、それゆえ、「リハビリ」の必要性を理解したことが伺える。

(3) 第3期 プラスの変化期

適応指導教室に定期的に通い、そこで友人関係を築き、A子はプラスの変化をどんどん遂げた。友人の話を聞き、自分の進路は本当に通信制高校でいいのだろうかと疑問を持ったり、一人で外出したり、自分が変化を遂げたことに自信をもったりと様々なプラスの変化を遂げた。そして、通信制高校でいいと言っていたA子は適応指導教室のようなサポート校進学を希望した。また、在籍校では、一人で相談室に通えるようになり、図書室で2回もの定期テスト別室受験を果たした。

このことは、植村・岸澤（2008）が指摘するように、適応指導教室で、自分のペースを保って活動ができる場を獲得できたことが、「行動の拡大」となり、自分と同じような生徒に会えたことが、「対人関係の拡大」や「精神面の向上」に影響していることが伺えた。また、植村・岸澤（2008）は、適応指導教室が、生徒のパワーレス状態を克服し、エンパワーするプロセスを支援し、また結果として、エンパワメントさせる機能をもつと述べている。概ね、その指摘の通りであるが、一点細かい指摘を行いたい。適応指導教室に生徒がつながるまでに、エネルギー補給が必要なケースも少なくない。菅野（2008）は、元気や意欲の素となるものが心のエネルギーであり、子どもに心のエネルギーが十分に補給されると、子どもの中に元気や意欲が湧いてきて、困難な課題に挑んで克服すること等ができると、心のエネルギーの補給の重要性を指摘している。A子のように対人関係における傷つき体験がある児童生徒は、適応指導教室という小集団への不安を覚えることもある。それゆえ、何らかの形で児童生徒に心のエネルギーを補給する必要がある。SCと繋がっている場合は、カウンセリングを通して、定期的に子どもに心のエネルギーの補給を行えるとよいであろう。

(4) SCと適応指導教室の連携について

ここでは、SCと適応指導教室の連携の実際についての考察を行う。まずSCと適応指導教室の主任指導員は、事前にSC連絡会で顔を知っている関係だった。それゆえ、お互いの人となりを知っていたため、安心感を覚えていた。このことは、A子を適応指導教室につなげることにプラスの作用をもたらした。

適応指導教室につなげたい場合に、学校の特別支援コーディネーターや担任から電話連

絡を行うだけでなく、SC からも、A 子の様子についての丁寧な情報提供を行ったことで、適応指導教室側が A 子へのイメージを十分に持てたこともプラスに働いたと考えられる。

その際に、SC 側も今の適応指導教室の雰囲気（通室している生徒数、学年、男女の割合、生徒の様子等）を電話で、情報収集した。出張制限があり、実際に足を運ぶことはなかったが、可能な範囲で「場」を見立て、今の適応指導教室と A 子のエネルギー量を比較し、今の A 子には週 2、3 回の登室は難しいであろうことを伝え、率直に「相談」した。適応指導教室側はできれば毎日通室した方がよい、少なくとも週に 2、3 回は通室するべきと考えていたことが伺える。しかし、SC の見立てを伝え、率直に「相談」したことで、連携の窓口を担当した適応指導教室の心理職に A 子の状態を共有してもらい、理解してもらった。その後、すぐに適応指導教室側の対応が柔軟になったことを考えると、SC が「橋渡し役」としての一定の役割を果たしたといえる。

出張制限がある SC が新たな「場」に児童生徒を橋渡しする場合、「場」を見立てるために、自治体の連絡会等で顔が見える関係を積極的に構築し、その後も、電話等で校内の相談室、適応指導教室の現状などを伝え合い、何事も生じていない時に、良い関係を築いておくことも工夫の一つである。そうすることで、何事か生じたときに、率直に「相談」できる関係ができるといえる。

(5) SCと適応指導教室が連携する新しい不登校児童生徒への支援についての試案

ここでは、本事例をもとに、SC と適応指導教室が連携する新しい不登校児童生徒への支援についての試案を提示する。

- ・自治体主催の SC 連絡会では適応指導教室からアナウンスを行う。心理職の有無等含めたスタッフの体制についてアナウンスがあることで、SC 側もどのスタッフがキーパーソンになるか等事前に把握できる。
- ・自治体主催の SC 連絡会における分科会等で、適応指導教室のスタッフが分科会をまわり、各 SC と顔をつないでおくとお互い「顔の見える関係」になり、安心感をもてる。
- ・自治体主催の SC 連絡会の開催場所は市役所等の庁舎の会議室になることが多い。しかし、年に一度は、適応指導教室がある建物で行うことで、出張制限がある自治体の SC も、連絡会の前後に適応指導教室の見学が可能になり、今後の連携がスムーズになる。
- ・適応指導教室の指導員等が各校を巡回する。可能であれば SC の勤務日に訪問する。そうすることで、適応指導教室の指導員等も、SC と会うことができ、相談室を見学することで、雰囲気もわかり、今後の連携がスムーズになる。
- ・可能なら、出調制限がある SC が、勤務日外に適応指導教室を見学に行く。そうすることで、見学もでき、指導員等との情報交換も行える。
- ・SC もケースに追われるばかりでなく、適応指導教室等の関係機関と電話連絡できる時間枠を勤務日に確保しておく。そうすることで、何事も生じていない時により関係を作ることができる。

- ・連携の際に何か困ったことが生じた場合は、率直に相談する。
- ・SC が、つなげたいケースの状態を、スタッフの職種（心理職・教育職等）に合わせて、伝えられるよう工夫しておく。心理職が配置されていない適応指導教室もある。それゆえ、教育職の指導員等の理解が深まる表現を日頃から工夫しておく。
- ・適応指導教室のパンフレットに、スタッフの顔写真や室内の写真、去年の活動内容等を掲載しておくことで、児童生徒、保護者が事前にイメージを持ち、見学等につながりやすくなる。

6. 総合考察

稲垣（2014）は、スクールカウンセリングまた学校教育相談が、相談室における SC との 1 対 1 関係による個別のつながり＝相談室への適応で終わっては、本来の目的が達成されたとは言い難いと指摘している。さらに稲垣（2014）は、スクールカウンセリングにおいては、何をどこからどうしていけば良いのか分からず戸惑い身動きが取れなくなっている生徒に対し、未来志向のガイダンスが効果を発揮する可能性があることを指摘している。

これをふまえると、A 子の周りにいた大人や友人が、戸惑っている A 子を未来志向のガイダンスで、相談室から次の場所に橋渡したといえる。また、各自が自分のできる範囲で、A 子のことを気かけ、A 子の支援を模索したことで、A 子の心にエネルギー補給が行われ、A 子はプラスの変化を遂げたといえる。

SC が A 子に対応する際に心がけたことは、今ここでの A 子の気持ちを大事にすることだ。カウンセリングでは、「今ここで」感じる気持ちを大事にする。中学 3 年生の 4 月という出会いで、長期間での支援ができない状況ではあったが、まずは A 子の「今ここで」感じる気持ちを尊重しつつ、SC の見立てや見通しを伝え、かつ SC のできる範囲でエネルギー補給を行いながら、背中を押す働きかけを心がけた。

学校におけるカウンセリングにおいては、生徒の成長を支援するために、次の 2 点が重要であろうことが A 子の事例から示唆された。①相談室だけの閉じられた支援ではなく、相談室から保健室などの校内、そして適応指導教室などの校外につなげるという開かれた支援を行うこと。②色々な傷つき・不安等を覚えている生徒の「今ここで」感じる気持ちを大事にしながら、心のエネルギー補給を、周囲の者が行うこと。この 2 点の支援があることで、生徒はプラスの変化を遂げやすくなる。そしてそのようなプラスの変化を遂げた生徒は、今度は逆に、自分が周囲の者に、心のエネルギーを補給するというプラスの循環が生じることが A 子の事例から示唆されたことを最後に指摘しておきたい。

7. 今後の課題

今回は、首都圏での SC と適応指導教室が連携した一事例であった。しかし、SC は全

国で活動している。そして適応指導教室も全国に設置されている。そのため、今後は首都圏内外で行われている連携の工夫点に着目し、全国の不登校児童生徒が、必要な時に必要なカウンセリングや小集団活動での指導を受けられるような連携についてのさらなる検討が必要である。

引用文献

- 福丸由佳 (2005). 中学校における不登校の女子とのかかわり スクールカウンセラーの橋渡し機能に注目して 心理臨床学研究, **23** (5), 327-337.
- 稲垣応顕 (2013). 学校教育相談 (教育カウンセリング) における理論背景とビリーフ 上越 大学研究紀要, **32**,35-43.
- 菅野純 (2008). 不登校 予防と支援 Q&A70 明治図書.
- 文部科学省 (2003). 今後の不登校への対応の在り方について (報告) <http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t20030516001/t20030516001.html> (2017 年 9 月 16 日)
- 文部科学省編 平成 27 年度文部科学白書 (2016). 日経印刷.
- 本山敬祐 (2011). 日本におけるフリースクール・教育支援センター (適応指導教室) の設置運営状況 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **60** (1), 15-34.
- 植村勝彦・岸澤正樹 (2008). 適応指導教室が不登校生徒に対してもつ機能の現状と期待 愛知淑徳大学論集 コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科編, **8**,109-124.

